
シンポジウム 3

胎生期から幼少期におけるストレス曝露が健康・発達に及ぼす影響

●シンポジウムの趣旨

精神神経障害は先天的な遺伝的要因のみならず、後天的な環境要因が加わって発症する多因子疾患であると認識されている。これは、社会・情報の多様化、複雑化による精神的ストレスの増大といった社会環境因子のみならず、胎生期から幼少期の母子環境についても広義の意味で生物学的環境因子として捉えられ、胎児期～老年期に渡るライフサイクルを通じた環境因子の神経・精神機能におよぼす影響が注目される。精神神経障害を対象にする病態研究や創薬研究においては、遺伝的要因からの解析に加え、様々な環境的要因やストレスの視点からのアプローチも必要であり、それらの影響を動物レベルでモデル化し、その分子基盤を追究することが重要である。

本シンポジウムでは、胎生期から幼少期におけるストレス曝露が成長後の精神・神経機能にどのように影響を与えるのか、また、そのメカニズムについてシンポジストの先生方にご紹介いただき、会場にお越しの先生方と共に議論を深められれば幸いである。